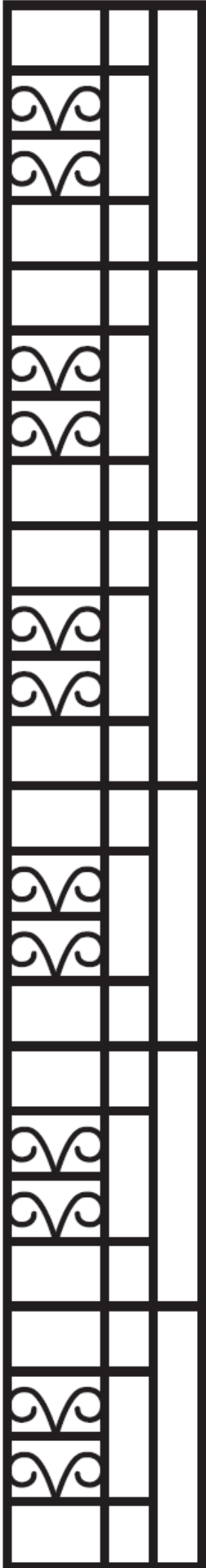


直木三十五と 富岡の家

大衆文芸作品に与えられる文学賞の直木賞。昭和初期の文壇に異彩を放った作家、直木三十五（なおきさんじゅうご）の名を記念して制定されました。大阪生まれの大阪育ち、上京しても都心を好んで生活した直木三十五が、金沢区の富岡を選び、終のすみかを建てました。死んだら自分の庭に埋葬してもらいたいといったほどに、富岡の地を愛していたといえます。

直木三十五が亡くなった後、その家は増改築されましたが、よく観察すると当時の面影を今に伝えています。しかし、老朽化等により、これ以上の維持や横浜市での活用が難しいことから取り壊されることになりました。

金沢区役所では建物所有者の方のご協力により、建物の記録保存調査の速報も伝えながら一般公開します。





§ 富岡に家を建てる

直木が富岡に家を構えたのは、肺病を患った晩年のことでした。海がすぐそばに迫る風光明媚なこの土地を、直木が気に入って、慶珊寺から土地を借りたのでした。

直木三十五文学碑が建立された昭和 35 年発行の『富岡の家』には、随筆家・内山順が慶珊寺の奥さんから聞いた話が紹介されています。

「昭和八年(ママ。昭和七年か)の五月頃、直木氏は慶珊寺を訪ねた。最初、寺院の横あたりに、小さな家を建てさせて貰いたい。そう云っている裡、辺りの景色が、ひどく気に入り、後ろの、畑になっている高いところを借りた。地代は、一年一坪五銭。一

三三五坪であるから年額六六七五円(ママ。六十六円七十五銭か)。持合せがないからと、約束した時百円置き、忽ち、東京から大工が来た。」

作業を始めたものの、7 月に大風に見舞われ、大工の仕事小屋が吹っ飛んでしまったといひます。なお、旧直木三十五邸記録保存調査で棟札が発見され、それには「上棟」「昭和七年九月一日」とありました。

直木の甥・植村鞆音(うえむらともね)氏は著書で次のように述べています。

「(富岡の家は)生れて初めて自分の意志で建てた家であった。いままで直木には、家を持つなどという発想はなかった。一生借金に追われた彼は、そもそも自身の所在を明らかにすること、財産を所有すること



旧直木三十五邸付近から、昭和 36 年 2 月に撮影した写真。手前の茅葺屋根は慶珊寺。おそらく直木三十五はこのような風景を眺めていたと思われる。(慶珊寺提供)





に否定的であった。税務署の追及を逃れるため、茅ヶ崎雲雀ヶ岡の農家の納屋を名目上の住居にしていたこともある。しかも、都心の仕事を好んだ彼は、実際に郊外で暮らすことなど夢想だにしていなかったはずである。それが、神奈川県のパ田舎に家を持った。」

植村氏は直木が富岡に家を構えた理由を2つ挙げています。ひとつは自身の病氣療養、もうひとつは自分の命が長くないのを予感して家族一緒に暮らすためだったと語ります。

『話』昭和8年9月号から連載された直木の「死までを語る」に富岡の家のことが掲載されています。

「(昭和)七年の夏から、金沢に、四十七坪の、ほんの小さい家——書齋、次の間、茶の間、子供、女中の五間——何うだ、玄関もないし、客間も応接間もない、ほんの家族が、それぞれの部屋をもってるというだけの家を建てかけた。

所が、よく考えてみると、この話に出てくる父が、大阪で健在である。しかし、もういつ引き取らなくてはならぬかも知れぬから、父の部屋を——と考えると、それが無い。それで、別に、私の書齋を、ドライコンストラクション式で、建てることにした。」

さて、1年足らずで建つと思っていたところ、電気がなかったため杉田から引っ張って来たり、配水・排水設備が必要であったりして、建設費以外にも費用がかさみ、工期が長引いたようです。

「七年七月から建てかけて、八年の八月、何うにか住めるようになり、移ったのが、十一月の五日。(中略)八月に出来て、十一月まで入れなかったのも、金の無い為である。諸道具一式女房にやったので、灰や、雑巾からして買わなくてはならぬ。一通り道具を揃えるのに、二千円程かかっているから、何処で、金がたまるか?」

病状も進み、金の工面もままならない深刻な状況にあって、どこか楽観的なところがあるようです。

§ おかしな家

菊池寛が「直木が、自分で設計した家なので、でき上がって見たら不便な個所が多くてこっけいだよ」と大仏次郎に笑って話したというエピソードがあります。

それでは、どんなにこっけいな家だったのでしょうか。

『富岡の家』編集者の平野零児によると「庭は数十坪の芝生にしてあったが、花は白いものだけが好きと見えて、ツツジと白ツバキだけが植えられ、建物の外はみんな黒く塗られ、手洗い場所も、フロのタイルも黒づくめ、一切が黒と白であった。」といひます。

のちに富岡の家を訪れた内山順は「家の中を黒づくめにした直木氏は、湯殿の湯槽まで、黒いタイルの角形。それが、その形のまゝ、家の裏手にあった。私共は、その湯槽を撫で廻わし、かつての直木氏の、在りし日を偲んだのである。」と語っています。

記録保存調査の際、「黒づくめ」の痕跡を





現建物所有者への聞き取りや建物調査で確認したところ、現存はしないが、浴槽は黒かったとの話が伺えました。トイレは壁のたちあがりの幅木部分だけ正方の黒タイルを使い、その上は白い壁、床は白タイルとなっています。そのほか、書斎の長押に黒漆を塗っているという特徴が見られました。

『文藝春秋』昭和9年4月号の直木追悼号に菊池寛らの談話があり、それには「兎に角押入れのない家なんで買手がないだろう。さう云う手抜かりがあつて…。」「納戸がチャントあつてそこへ入れるやうになつて居て、押入れが一つもない。」「玄関が縦にした一疊なんで、二人縦に並んで這入れない」「木だつて安い所と、高い所と、滅法界違ひ過ぎるんですね。」「手で押すと撓むやうな板が押入れなんかへ喰附けてあるんですね。廊下を歩くとみしみし云ふ。さうかと思ふと窓硝子が豪華でもつて、二枚の硝子なんだ。」とあります。

植村氏は「まず玄関がない。幅三尺三寸の入り口があつて、それが廊下に直接繋がっている。一説に借金取りが入りにくいように設計されたといわれているが、真偽は不明である」と書き記しています。

現在は改築され立派な玄関がありますが、廊下のつきあたりにあるような半間の裏口と同様の入口が、表側にもあったのではないかと推測することができます。縁側の窓ガラスは当時のままで、これだけ広い1枚ガラスはなかなか手に入るものではありませんでしたし、このように贅沢に使うということも当時としては珍しいことでした。書斎の腰高の出窓は、現在も二重窓で当時の面影を伝えています。

§ 短かった富岡での暮らし

生前、親交のあった菊池寛は「富岡の家は出来上がっても一週間ばかり住んでいただけで依然として倶楽部（木挽町八丁目）にいた」と語っています。せっかく新築したにもかかわらず、直木は昭和9年の年明けには、作家や編集者が行き来していた倶楽部に戻っていました。直木の体調が思わしくなかつたので、客足も遠ざかっていましたが、客好きでにぎやかな雰囲気が好きだったのだといわれています。そんな直木を気遣って、菊池寛が毎晩のように倶楽部を訪れ、一緒に過ごしたことが伝えられています。

直木は結核性脳膜炎で昭和9年2月24日に永眠しました。『文藝春秋』昭和9年4月号に長女・木の実さんの「思ひ出したままに」が掲載されています。

「富岡の家は、御自慢でしたのに、半年もお住ひにならず、去つておしまひになりました。

眞館さんや、私達と、永く住む家だと私、よろこんでをりましたのに。——そして、夏は海水浴をしようなどとおつしゃいながら、ひと夏もすごさず、そして、春のくるのに、それもお待ちにならず去つておしまひになりましたのね。」

娘の前では、執筆活動に明け暮れ借金に追われた直木とは違う、夢を語る父親の姿があつたのかもしれない。





§ 直木三十五 略年表

- 明治 24 年(1891)2 月 12 日 大阪市南区内安堂寺町通二丁目(現大阪市中心区)に父植村惣八、母しづの長男として生まれる。本名 植村宗一。生家は古物商。
- 明治 34 年(1901) 大阪市立桃園尋常小学校卒業。
- 明治 38 年(1905) 大阪市立育英第一高等小学校卒業。
- 明治 43 年(1910) 大阪府立市岡中学校卒業。
岡山第六高等学校文科一部乙の受験を放棄。
このころ、後に妻となる佛子寿満(佛子須磨子)を知る。
奈良県吉野郡白銀村奥谷尋常小学校の代用教員となる。
- 明治 44 年(1911) 早稲田大学英文学科予科純文芸科入学。
- 大正元年(1912) 佛子寿満と東京市牛込区下戸塚 324 番地で同棲生活(入籍は大正 8 年)を始める。
- 大正 2 年(1913) 英文科から高等師範科へ転籍。月謝未納で除籍。
- 大正 4 年(1915) 同級生卒業。記念写真撮影に参加。
- 大正 5 年(1916) 長女木の実(このみ)誕生。
- 大正 6 年(1917) 新興美術社勤務。雑誌「新興美術」に植村宋一名で執筆。
- 大正 7 年(1918) 神田豊穂らと「杜翁全集刊行会」(のちの春秋社)を興す。
鷺尾浩(雨工)と冬夏社を興す。
- 大正 8 年(1919) 矢野橋村らと雑誌「主潮」を発刊。植村宋一名で毎号評論を執筆。
- 大正 9 年(1920) 長男昂生(たかみ)誕生。
- 大正 10 年(1921) 人間社の経営を引き受ける。ペンネームを「直木三十一」とし、「時事新報」に評論を執筆。以後、数え年でペンネームを「直木三十二」「直木三十三」としていく。
- 大正 11 年(1922) 人間社倒産。三上於菟吉の出資により元泉社を興す。
- 大正 12 年(1923) 「文藝春秋」創刊。毎号、評論・雑文などで健筆をふるう。
関東大震災のため、大阪に戻り、プラトン社に勤務。
雑誌「苦楽」の編集にあたる。
- 大正 14 年(1925) プラトン社を退社。牧野省三らと「聯合映画藝術家協会」設立。映画製作に乗り出す。
- 昭和元年(1926) ペンネームを「直木三十五」とする。
- 昭和 2 年(1927) 「聯合映画藝術家協会」を解散。上京し麹町区下六番町 10 に住む。
- 昭和 5 年(1930) 東京日日新聞、大阪毎日新聞に代表作「南国太平記」を執筆。一躍人気作家となる。
- 昭和 6 年(1931) 麹町区紀尾井町 3 に住む。





昭和 7 年(1932) 紀尾井町の家をたたんで、木挽町の文藝春秋社倶楽部に本拠を移す。

昭和 8 年(1933)6 月 寿満と離婚。

昭和 8 年(1933)12 月 富岡の新居（金沢区富岡町 1982 番地）完成。

昭和 9 年(1934)2 月 9 日 脊椎カリエスのため入院。

昭和 9 年(1934)2 月 24 日 結核性脳膜炎のため死去(享年 43 歳)。

昭和 10 年(1935)1 月 菊池寛により「直木三十五賞」が制定される。

昭和 35 年(1960)10 月 旧直木三十五邸前に「藝術は短く、貧乏は長し」文学碑建立

§ 参考文献

平野零児編 『富岡の家』 横浜ペンクラブ 1960

植村鞆音 『この人 直木三十五』 鱒書房 1991

植村鞆音 『直木三十五伝』 文藝春秋 文春文庫 2008

菊池寛編 『文藝春秋』直木三十五追悼号 文藝春秋社 1934.4

※『話』「死までを語る」1933 の記述は、『この人 直木三十五』から引用しました。

旧直木三十五邸記録保存調査は Campus Town Kanazawa 推進事業（大学の活力を生かしたまちづくり）の一環として、関東学院大学人間環境学部人間環境デザイン学科水沼淑子研究室の協力を得て実施しています。

直木三十五と富岡の家
（旧直木三十五邸一般公開配布資料）
平成 23 年 6 月 26 日発行
金沢区役所区政推進課企画調整係
TEL : 045-788-7726 FAX : 045-786-4887

